

# 「人間の壁」のリアリズム

高田瑞穂

石川達三は、長編「人間の壁」（昭和三三・三四）を書き終えた直後、三十四年四月十四日の朝日新聞に『「人間の壁」を終って」という一文を掲げた。その中で彼は、「現在の日本の社会が直面している種々な問題が、ある意味ではすべて教育問題のなかに集約されていると言えるかと思う。教育問題が容易に解決しないのは、日本の政治と社会とが完全に二つに分裂している、そういう現実の反映であった。」と記して、そこにこの大作を生むそもそものきっかけのあったことを語っている。そして今「人間の壁」を書き終えて、「私自身、この作品によって、何ものをも解決してはいない。ただ、問題につき当り、この問題の輪郭を描いて見たに過ぎなかった。」といい、「しかし現在の日本の課題は、この分裂した社会をどう調整するかという事であるに違いない。私は今度の作品を書いたことによって、この分裂の傷口に手をふれた思いがするのである。それが私の一番大きな収獲であった。」と述べ、その「分裂の傷口に手をふれた思い」を実感するた

めにも「約八ヶ月の勉強」の必要であったことをわれわれに告げている。「人間の壁」は当然、一大長編となった。しかも、われわれは、少くとも私は、「若ものよ からだを鍛えておけ……」の歌をその最後の頁に読み終えて、いささかも終ったという感じを受け取らなかった。石川の追求しようとする問題が、事実いかに重大なものであったか、いかに今日ただ今の問題であるかが、そのことから納得されずにはいなかった。それはそれでいい。しかし、それに続く一文の結末において、石川は次のように宣言する。

「この作品は私にとって厳しいものをもっていた。はじめ私は自民党政府の文教政策を非難するつもりも、教職員組合を弁護するつもりも、何もなかった。いわば白紙の立場でとりかかった。しかし問題を追求して行くにしたがって、それを批判する私自身の立場が要求されるようになって来た。分裂している二つの社会のうちの一つを選ぶ事を要求された。結局私は、いわゆる人自由な立場の作家Vの自由さから、自

分をはっきり規定する立場を取らざるを得なくなった。私は自分の気持の底の方にあった反保守党的なものを、自分の表面に引き出して、はっきりと自分の旗じるしを決定することになった。その意味において『人間の壁』は私を拘束する。私は朝日新聞の数百万の読者を裏切ることとは出来ない。この作品は私の公約である。」

石川達三は周知の通り、『蒼氓』の昔から遅ましいリアリストとして出発した。『蒼氓』はたしかに第一回芥川賞に値する、小説らしい小説であった。追いつめられて祖国から逃亡を余儀なくされた人々の、叫び、泣き、笑う姿が、いかにも起りそうな事件の継起をめぐって鮮明に明滅した。私はこの作品によって、見も知らぬ移民収容所の暗い眺めを事細かに教えられ、そして納得させられた。渡航条件を満たすために偽りの縁組をする人々、トラホオムを隠そうとする人々、紛れこんだ刑事犯人、声一つ立てる術も知らずに貞操を奪われる女、栄養不良の嬰兒、さては白痴。追いつめられた人々のこの様な姿は、たしかに私の目に映った。然し、そこに奇妙なことが起った。それほど鮮明な人間群像を見せつけられつつ、かつて私はこの小説に涙一滴をそいだ記憶がない。『蒼氓』の芥川賞授賞は昭和十年のことであったが、この作にまつわる右の印象はその後長く私の内に止った。私は、昭和十六年、既に発表されていた第二部『南海航路』第三部『声なき民』を併せ読んで、一編の石川達三論(註一)を書いた

が、それは、上述の如き奇妙な「蒼氓」の印象の自解であった。その一節をここに引くのは、単に懐旧の思いからだけではない。往時からすでに二十年の時が流れ、それでいて私の「蒼氓」観は旧態依然として基本的にはそこから出られないでいるからである。

「石川氏にとっては、現実には常に描かるべきものとして在った。眺めさえすれば描ける。そして現実には眺めた通りに在る。これが氏のリアリズムの基本精神であった。現実を直視して遂がぬと言われる氏のリアリズムとは、実は作家にとつて危険極まる一種の現実蔑視に外ならなかったのだ。そしてかかるリアリズム万能の態度は、一見実に堂々たる様相を呈するにも拘らず、遂に現実の秘密に対して盲目であり、反つて現実の皮肉極まる反撃によって己が文学の骨を枯らすに到る一般的運命を逃れ難い。……然らば『蒼氓』に於て、氏は果してこの宿命に抗し得たであろうか。その解明はやがて先に述べた私の『蒼氓』観の基底をも物語るものとなる筈である。」

石川達三のリアリズムが、何故「一種の現実蔑視に他ならぬ」のかはしばらくおいて、少くとも「現実には常に描かるべきもの」として彼の前に在り続けたことは、今日の石川においても、本質的には変るところはなさそうである。何故なら「人間の壁」もまた、「描かるべき現実」を精細に描いた作品なのだから。ここでもう一つ見ておきたいことは、単行『蒼氓』の自序において、石川が次のようにのべていることであ

る。引用の重複を、しばらく許容してもらわなくてはならない。

「第一部を発表當時は、これは政府の移民政策への反抗であるという風な評を聞き、やや心外に思っていたが、最後まで読んだ人には後者の真意を正しく理解して貰へると思う。作者は政府の方針を特に支援もしなかったが反対もしなかった。ただ自分の眼をもつて大移住の真実を見たいと思った。

私は宣伝係ではないから真実を語りたいと考えただけである。私は移民たちにもわかってその計画を中止するように勧告した覚えはない。再渡航者の口を借りて肯定的な解釈を与えた筈である。」

この自序のうちには、明らかな石川達三のリアリズムを解く鍵がひそんでいる。彼は大移住の真実を見たいと願ってそれを見ることができた。自ら一移民として南米に渡った。既に眺めた以上、眺められた現実には二つはない。「真実を見た」「真実を語りたい」と彼はくりかえしているが、「真実」とは、明らかに彼の眺め得たもの、そして眺めた通りに在るものと信じられていた。石川にとって、「真実」とは「現象」であったか、精々「直視された現実」であった。「現実」「現象」の次元と「真実」の次元とは、明らかに混同され、両者は平面的に並存する。こういう石川の態度は、第一部の批判に対する応答の仕方にもはっきり影を落している。「やや心外」ということばも微妙であるが、それよりも、自分の中立的立場は「最後まで読んだ人には」「正しく理解して貰へる

と思う」に徴して明らかである。しかも、その中立的立場の証しは、「再渡航者の口を借りて肯定的な解釈を与え」ておいた以上、そこに疑問の余地はあるまいという。私はその口吻の素朴さを見のがすわけにはゆかない。自己の目で眺められた現象は、やがて真実であるという判断の素朴さと、登場人物にそう言わせておいた以上、そこを読んだものには作者の立場はおのずから明らかであろうという主張の素朴さとは疑いもなく一つの対応を形成する。そしてかかる素朴さはまた、必然的に石川のリアリズムそのものの素朴さをも物語らずにはいない。真実とは、自己の目をもって眺められた現実であるというリアリストにおいて、その自己の目はどんな働きかたをするであろうか。現実、現象と真実とを同一平面においてたずねようとする以上、その目は、現実の細部から細部へ、暗部から暗部へと平行移動をする以上に、どういふ働き方が可能であろうか。そしてその行きつく果は、細部・暗部こそ現実の深部であり、つまり真実であるという誤謬である。石川の表現が、しばしば暴露的傾向を示し、その作品がしばしばルポルタージュ的性格をおびたのは、このためだったのである。石川は、そういう自己の作家的立場をそのままに、「蒼氓」から「日蔭の村」(昭一二)に、「生きてゐる兵隊」(昭一三)から「風にそよぐ葦」(昭和二四・二六)に、そして「人間の壁」まで、足音も高く歩み来ったのであった。「蒼氓」の場合と全く同じような「やや心外」な批判にたえずとりまかれながら。そして、その「やや心外」な思

いをその都度素直に表白しながら。

「私は人間と社会とに対する慨きと祈りの心を罩めて『風にそよぐ葦』を書き綴ろうと思った。書き終って心たのしきものが無い。」

これは「風にそよぐ葦」完結の直後、昭和二十六年三月十四日の毎日新聞に発表された「解決なき結末」の一節である。

「人間の壁」のリアリズムも、依然としてその本質は「蒼氓」のそれと変わるところがない。石川の認識は、徹頭徹尾、現実・現象の次元を離れない。執筆を決意した三十二年一月から、連載のはじまる九月までの約八箇月、その間における石川の精力的な準備活動は、彼自身の物語るところにいつわりはなかったであろう。新教育に関する初歩的な勉強から始まり、日教組本部から報告やパンフレット五百冊を入手し、文部省刊行の指導要項類の一切をととのえ、さらには、教育年鑑・教育小六法から憲法解説書にまで及ぶ、文字通り活字の山を、石川は片端から読破していった。それは異常というに足る情熱であった。と同時に彼は、教育現場の実情を見るために、金沢・茨城・群馬・山形・千葉、さらには九州へとあわただしい旅を重ねた。石川は「自分の目で」実に様々な記録をたどり、実に様々な教師たちの言動を見た。そこにこそ「人間の壁」の誕生を可能にする、一切の基底が用意されたのだったにちがいない。しかし、私はここにくりかえして

言わねばならぬ。石川の目は、徹頭徹尾、現実・現象の次元を離れなかった。だから石川の態度は、自然を観察する科学者のそれと同型であった。石川のリアリズムを合理主義的と規定することは、その限りにおいて誤りではない。しかし、徹頭徹尾、現象・現実に向けられた認識、言いかえると対象に限定された認識は、決して全能ではあり得ない。そこにこそ石川達三のリアリズムにおける根本的な問題がある。

客観的知識としての認識が成り立つためには、単に感性によって対象を受け取るだけではなく、受け取った対象について判断する能力が加わらなければならない。判断する能力を悟性と呼ぶことにすれば、個人的任意的ならざる認識を可能にするものは、感性と悟性である。感性なしには如何なる対象も与えられないであろうし、又悟性なしには如何なる対象も思惟せられ得ないであろうから。そこまでは問題はなしい。石川における感性は十分に鋭敏であり、その判断力もまた十分に強固であることは、よく人の知る通りである。だからこそ石川は、常に対象を自己の目で見ることが欲し、そして見ることで満足した。しかし、人間の目に映るものは、いつでも時空的な対象である。そして、時空的なさまざまな対象から生起したとりとめのない印象の群に、統一と連関を与えるものが、悟性である。だから、常に対象に向かい、自然に対する限りにおいて、悟性の機能は完全にして欠けるところはない。悟性が自然の立法者と呼ばれる所以がそこにある。自然科学を可能にするものはかかる対象に向けられた悟

性である。その意味では悟性は、科学的理性である。しかし悟性が対象面に関する限り完全な機能であるということとは、言いかえると、悟性が常に自然・対象によって束縛されているということである。つまり、科学的理性の支配は自然・対象の外ないし奥には及ばないのである。かかる理性すなわち悟性の規定する法則は、したがって、常に自然・対象を規定するけれども、ひるがえって自己を規定することはできない。悟性の持ち得る一切の価値は、その所産に帰せられて、自己には帰せられない。悟性自身が価値を有する如く見える場合も、それはやはり所産の価値の反映であるにすぎない。石川達三に個有な資質が、如上の意味における悟性であることは、彼の関心が断えず、そして終始対象に注がれ続けているという事実が何よりもよく物語るところであった。だから石川は、実験小説論時代の自然派と極めて近い作家であると考ええることも可能である。しかし、かかる対象の理性をして対象面以外にもわたる一切の領域を支配させるわけにはいかない。石川は、自ら自分の悟性を厳しく抑制する必要があるたのである。もし彼が、悟性を悟性として限定するを知っていたとすれば、彼は自己のこの目で見たと、真実との間に横たわる全き不連続に当然気づいてよかったのである。現象と真実とをへだてる深淵の前に、その足をとめて然るべきだったのである。そうするためには石川は余りに自己の目を信じすぎた。結果として彼は、本来妥当すべからざる領域にまで、悟性の支配を許した。今悟性の世界を越えた世

界を形而上的世界とすれば、石川は、古くさくして根柢なき形而上世界を地上に引き下したと見えなくもない。そこに近代合理主義の勝利を見る人もあるであろう。しかし、実は、悟性をして野放図に一切の領域を支配せしめたということが、それ自身古き誤れる形而上学なのである。感性を統一するものが悟性であり、悟性に支えられる世界を対象界とすれば、対象界を超えた世界を可能にするもの、言いかけると悟性を統一する原理は、当然悟性を超えたものでなくてはならない。かりにこれを理性と呼べば、悟性による雑多な認識に何等かの統一を欲する以上、この理性による統一しかあり得ない。そして、感性から悟性へ、悟性から理性への認識の展開こそはそれ自身全く人間的なものである。まことに「形而上学は——それが他のあらゆる学問よりも古く、且つ一般に、一切を絶滅させる野蛮主義に他のあらゆる学問が絶滅される場合が起るとしても残留するであろう……（註二）」

「人間の壁」に帰ろう。

石川達三が、この作品を書くことによって「分裂の傷口に手をふれた思いがするのである。それが私の一番大きな収穫であった」と述懐していることは先に記した。私もまた、この作を通じて、実にさまざまなことを教えられた。学級経営とはいかなるものであるか、国会闘争がいかに戦われたか、拡大闘争委員会はどうのような空気をはらんだか。そして、児童と児童、児童と教師、教師と教師、教師と父兄、父兄と父兄等々の錯雑した人間関係の諸相。それらを知らされ、それ

らについて説得されたことは、読者である私にとってたしかに一つの収穫であった。私は作者に感謝の意を表すべきである。それにもかかわらず私の収穫は必ずしも私を満足させはしなかった。石川は「傷口に手をふれた思い」に「一番大きな収穫」を見出だしたという。もしそれが世間並の自己卑下でない以上、それは作家にとって、まさにそこから作品を始むべき出発点ではないか。私の不満はこの疑惑と結んでいった。そうは言っても、私は、『人間の壁』を「終つて」の揚足をとっているのではけつてない。大長篇「人間の壁」そのものに即して言っているのである。私の如上の疑惑は、石川の八箇月にわたる準備・調査が、如何に大きな努力を要したかを考え併せることによつても、それによつて解消するものではない。作中人物が巻を追うて次第に類型的な善玉——その典型は尾崎ふみ子と沢田保次郎である——と、それに真正面から対立する悪玉——その典型は志野田健一郎と一条太郎である——とに墮してゆくとともに、表現もまた次第に純然たる記録——その典型は「国会鬭争」の章である——と、逆に感傷的とも言ふべき過度に情緒的描写——その典型は「台風季節」の後半——との交互する安易な形に終つていったこと等は、いづれも「傷口に手をふれた」所から出発せず、書き終えてはじめて「傷口に手をふれた思い」を味わつたというが如き石川の態度と、正しく照応した結果だったにちがいない。問題の大きさに比して、八箇月の準備は、結果的に短かすぎたとも言える。しかし、真の原因はそこにはない。

たとえ十箇月にのぼしても十年にのぼしても、来るべき結果はやはり将来されたであろう。問題はここでもまた、石川のリアリズムそのものの中に見出だされなければならない。問題は問題を呼ぶ。

右のごとき小説制作上の不徹底は、もちろん制作途上の石川自身に何等かの反映を示さずにはいなかったはずである。だからこそ石川は、「問題の輪郭を描いて見たに過ぎなかった」と記した。それだけでも満たされぬ自分の思いが、「この作品は私の公約である」という宣言にまで及んだ……。もちろんこれは私の憶測にすぎない。しかし、二つに分裂した社会のいずれにも属さず、ひたすら問題そのものに直面しようとした最初の意図を中道において放棄し、明らかに一方の立場に組し、その立場への忠誠を、「私は朝日数百万の読者を裏切ることではない」という公開宣言の形において約束したということは、やはり注目に値する事実でなければならぬ。そして、こういう石川の社会的行為の中にも、自らの資質・方法はたしかに生きていたにちがいない。石川が、一個の市民として、日教組に組しよう、自由党に加担しよう、もとよりそれは彼の自由に属する。私の知つたことではない。しかし、作家たる石川が、当面の社会問題ととり組んだ巨大な作品の制作過程において、何人の目にも明らかな露骨さにおいて登場人物を色分けし、一方を愛し一方を憎んだ末に、さらに加えて何故このような「公約」を掲げなくてはならないのであるか。自己の作品のあかしをかける「公約」

において示すべきだと一般に考えれば、石川は、「悪の愉しみ」や「四十八歳の抵抗」やに關してもまた「公約」をすべきであろう。

「捕へ難きわが心よ。けれども多くの人間の幸いは、自分の心を知らないことにある。私もまたこの愚かしき群の一人であるかもしれない。」

これは「結婚の生慥」の自序の一節である。これはまた何とつましやかな表白であることか。しかしそこにも、作品合理化の意図はかくれもない。石川はある意味で正直である。常に対象を追う悟性は、たしかに「自分の心を知らない」であろう。知り得ないであろう。だからこそ対象の探求によって自足することが可能なのである。そのような石川のリアリズムは又当然対象によって束縛されずにはいない。作品の現実性を支えるものは、石川の場合は常に内になくして外に在る。文学の世界は、現実に向って一方的に交流することによって、逆に現実が文学の世界を支える。明らかに一つの混同が生じる。混同を混同として意識するかわりに石川は「この目で見た真実」と言う。読者はその自信にあふれた石川の風貌に思わず納得させられる。

「文学」昭和三十四年十一月号は、杉浦民平の「『人間の壁』と記録」を巻頭に、二篇の入選論文「『人間の壁』のリアリティとアレゴリー」進隆、「『人間の壁』の方法について」古川照子を掲げて、さながら「人間の壁」特集の觀を呈した。二篇の入選論文は、評論家の手に成るものではなく、

よき読者の手に成るものとして私には興味深いものであった。ことに進隆の考察は、その論旨の明澄さにおいて記憶されていいものであった。

「彼はリアリズムの基本法則を忠実に守らなければならなかったのだ。佐賀に土着の風土性と佐賀県の人々の三・三・四闘争の一部始終を書かねばならず、またそのみに限定せねばならなかったと思う。」

しかるに石川はそうしなかった。

「書くに価すると判断した全国のデータをもれなく一つの作品にはめ込むためには、物語の背景は佐賀ではなくてS——県でなければならず、人物の会話は方言ではなくて標準語でなければならず、つまり場所も会話も平準化が必要であったのだ。」

この指摘から、次の結論はもう一步である。

「こうした設定のしかたは考えてみれば、リアリズムから遠ざかって、アレゴリーへ近づく途である。アレゴリーの容器に盛られたリアリズムの料理！」

進隆は、ここに明らかなように、リアリズムを信じている。彼の如上の立論の根拠は、彼自身のリアリズム論である。それはほぼ次の如きものであった。

「具体的な個々の現実を作家が正しく捕え秩序を追って追求していけば、そうしてそういう仕方によってのみ、彼は現実全体のアスペクトを映し出している水面の前に立たされるはずだ。」

「微視の世界が、巨視の世界への途であるように、個々の具体的な、特殊な現実とは、その中に現実全体の姿Ⅱ真実を宿しているのだ。」

私は進の一文を、半肯定し半否定する。肯定するのは「人間の壁」の作品としてのリアリティの弱さの指摘、否定するのは筆者のリアリズム論である。後者に関して一言すれば、進は、「具体的な個々の現実を正しく捕え、秩序を追って追求していけば」と言う。「正しく捕える」とはどういうことであろうか。「秩序を追う」とはどういう秩序なのであろうか。恐らく筆者にとってそれらは自明のこととしてあったようである。何故なら、「微視の世界が巨視の世界への唯一の道」なのだから。「個々の具体的な、特殊な現実とは、現実全体の姿Ⅱ真実を宿しているから。」しかし、私は、個々の現実と現実全体との間に横たわる断絶を言わなければならぬ。真実の認識が、現実の感得から始まることに疑いはないけれども、だからといって真実は、個々の現実から直線的・必然的に到達できるはずのものではあるまい。人生における個々の、したがって特殊な行為の意味を熱心に問うことが、かえって人生全体の意味の把握をさまたげることが如何に一般的であるか。対象的悟性と対自的理性との次元はけっして同一ではあり得ない。むしろ私には、石川をせめる進のリアリズム論そのものが、まさしく石川のそれであることを見出ださないわけにはいかなかった。そこから又、「佐賀に土着」の作品としなかつたところに「人間の壁」の弱点を見る見方

も派生する。「人間の壁」のリアリティに不満なのは私とても変りはない。しかし、それは「佐賀に土着」させることによって本当に救われ得たであろうか。そうではあるまい。石川における現実と作品との如上の混同が改められない限りにおいて、石川の描く「佐賀に土着の風土性」と佐賀人の闘争」の描写もまた、佐賀県という、日本の規模よりは小さい、しかしそれはそれでやはり広大な一規模においてくりかえされにちがいない。一条先生やふみ子を、田舎仕立に改めたにしても、そこに本質的な救いはなさそうである。問題はここでもまた、石川の認識そのものにある。

杉浦民平の「『人間の壁』と記録」は、「人間の壁」を通じての「記録文学」の提唱である。これはこれで一個の主張であるけれども、「フィクション」によれば、事柄の荒すじばかりが残って、現実のもっている緻密な実質はすっかりこぼれ落ちてしまう」というその論拠には、にわかに同じ難いことを附言するに止める。すでに石川達三こそは、「記録文学」の達人であることを認め、そのことにおいて私は石川の作家的認識に不満を表明したのだから。進隆も杉浦民平も、今私の目には、石川の精力的なリアリストとしての面貌に、何程かずつ引かれてるように映る。私は、冒頭の彼の「宣言」にもう一度帰る必要を感じる。

およそ作家の誠実のあかしは、作品において示した自己の立場を、「公約」として「宣言」することであるか。そういう態度は一般に可能であり、正しいか。これが私の最初の問



題であった。私はそこに、作家石川達三の二重の誤解を見ようとしたのである。その一つは、上述した如き彼のリアリズムの悟性的性格とその混乱とである。もう一つは、そこに見られる理性的次元への無意識的希求である。

私は先に、感性から悟性へ、悟性から理性への展開は極めて人間的であると記した。対象的悟性は、それ自身をそれとして意識するところに、すでに自覚的理性への希求を秘めており、この理性への希求においてはじめて人間理性の本来的な働きが生じることを疑い得なかったからである。対象にのみ向けられた特殊の理性の全能を妄信することを止めた時、人間理性の本来の自覚的機能は蘇生する。悟性の自然認識は究極において、対象は何であるか、何であったか、何であるであろうか、ということだけである。対象に向って現にあるものとは異った何かであらねばならぬと命ずることは、悟性にとつては不可能である。この不可能を可能にしようとすれば、悟性の自然範疇をこえた、別の範疇によるほかはないであろう。そしてそれは対象においてではなく自己において、束縛においてはではなく自由において、独自の秩序を自ら構成し、自然秩序に対して「かくあれ」という事のできるもので

なければならぬであろう。それは、単に自己の目をもって対象を眺めることからは生れることはない。もし文学上のいわゆるリアリズムが、手法上の概念であるとすれば、観察上の手続きであるとすれば、石川達三は稀有のリアリストである。しかし、それを文学上の一理念であるとすれば、作品の生命の所在を指すことばとすれば、石川達三のリアリズムは平板にして低次であるといわなければならない。そしてそのことに對するある程度の感得が、やがて石川を駆って、いずれも作品完結直後の時に、あるいは「心たのしきものが無い」と言わせ、あるいは「捕へ難きわが心よ」と言わせ、さらには「この作品は私の公約である」とも断言させていたのではないか。そしてそういう事実の中にも、私は理性のつぶやきを感じ得ずにはいらなかったのである。石川は、後に書くことを先に書くべきである。「人間の壁」によって拘束されるかわりに、「人間の壁」を拘束し規正すべきである。その時石川の文学に新しい世界が開かれるにちがいない。

註一 昭和一六年刊「展望・現代日本文学」所収「石川達三論」  
註二 「純粹理性批判」第二版序。天野貞祐訳による。